

## 第7回 武蔵野市生涯学習計画策定委員会 議事録

日時 令和元年10月10日（木）17時30分～19時30分  
会場 武蔵野プレイス4階 フォーラム  
出席者 板垣文彦委員、宇佐見義尚委員◎、助友裕子委員、嶋田晶子委員、白田紀子委員、  
花田吉隆委員、牧野篤委員○、松村勝人委員、斉藤愛嗣委員、福島文昭委員  
◎委員長、○副委員長

資料 資料1 武蔵野市生涯学習計画 中間まとめ（案）  
資料2 第6回委員会での主なご意見と対応

### 次 第

#### 1 計画の骨子案について

事務局より、資料1・資料2を用いて第6回委員会からの中間まとめ（案）の変更点について説明を行った。

#### 基本理念について

委員長 12月にパブリックコメントが行われるので、今回、次回で内容を固めないといけない。まずは、中間まとめ（案）21ページの基本理念について意見交換を行いたい。その後、施策方針1、2について話し合いたい。施策方針3、4は次回に話し合いたい。

委員 明るいメッセージを感じた。1段落目と2段落目の間に、格差の視点が必要になると思う。長く生きられる人もいれば、そうでない人もいる。共生社会の根拠として格差について触れられるとよいと思う。

委員長 最初に「経済の停滞の長期化」と書かれているが、様々な説があり、停滞していないという説もある。また、「人口減少・少子化等」と書かれているが、高齢化を抜いているのはなぜか。

事務局 高齢化を課題と捉えたくないと考え、少子化のみを取り上げた。

委員長 高齢化は現実である。少子・高齢化という言葉が流通している中で、高齢化がないことが気になる人もいるだろう。

また、日本社会に将来への閉塞感が広がることや、個人が社会の中で孤立するようになってきていると、断言してよいのかも気になる。表現や語尾をもう少し工夫して、断言することを避けた方がよいのではないか。

また、「グローバル化」という言葉は、経済のグローバル化のことなのか。

委員 この文章全体には、2つの事柄が書かれていると理解した。前半は個人が主体的に学ぶことの重要性が書かれており、後半は個人と社会のつながりについて書かれている。前半では「変化との関係で」、主体的な学びについて書かれているが、変化の有無にかかわらず主体的な学びはあり、それ

こそが重要なのではないか。自分の中に眠っているものを発見し、自己肯定感のようなものにつなげることが学びだと思う。人生100年時代には、学校以外でも学ぶことができるようになっており、だからこそ主体的な学びが必要になっているのではないか。変化にかかわらず主体的な学びが重要であると書くべきだと思う。

副委員長

後段の社会とのつながりが学びの目的のひとつになるということは、疑問である。主体的な学びを続けると一人ひとりがより輝いた存在になり、そのような人が増えるとまちが豊かになるということではないか。個人と社会がつながることを学びに求めているのだろうか。また、行政の事業として追及していくべき事柄なのかということも気になる。行政は踏み込みすぎてはいないか。結びつけることは目指すことではなく、学習機会を提供し、支援をしている中で結果として結びつくものなのではないか。この計画の方向性がはっきりし、とてもよいと受け止めている。ただ、現在の社会がよいということを明記してはどうか。過去の経済発展をとおして物質的にも文化的にも社会が成熟してきたということを書いた上で、新しい社会に移行する中で問題が起こっていると書いた方がよい。技術的には展望が開けている一方で、貧困や孤立という問題が社会的な課題となっており、両面を取り上げていく必要があると思う。ただ、過去のようにみんなが同じ方向を向いて物質的に豊かになっていこうという状況ではなくなくなっているので、自ら学び、自分の人生をつくっていかなければならないし、その先に社会がつくられていかなければならないと思う。だから探求していく学びが必要だという論旨にはいかがか。

さらに、目指すべきまちの姿については、それが何であれ、自分たちがつくるのだということに重きが置かれるのだと思う。自分たちが新しい武蔵野市をつくろうという姿勢である。新しい武蔵野市がどんな姿であるべきか分からないので、学びながら探求し、つくりながら答えを見出していくということが書かれるとよいと思う。

よい社会をつくってきた結果、現在においては結果的に少子高齢化や人口減少が発生し、経済構造も変わっているのだと思う。そして技術革新があったからこそ、これまでにない社会が到来するようになっているのだと思う。過去の積み重ねの結果だが、過去の経験にすがって「お父さんの背中をみて生きろ」とは言えない時代になっている。だからこそ、いっしょに学び、探求し、みんなで答えを見出すという社会のありようを打ち出してもらいたい。

委員長

全体の論調として、文章の導入が課題から入っている点はたしかに気になる。

「学び送り」の本質的な問題は、世の中につくすことを求めるのではなく、学びを深めるためのツールとして、誰かに教えることで自分の学びがさら

に深まる、ということが第一義であるという認識でよいのか。そうであれば、文章の力点を変えた方がよいと思う。人に学びを返すということは、自分自身の学びを深める、ということの意味するならば、「学び送り」の表現を変えた方がよいと思う。

事務局 「学び送り」は、自分の学びが深まるということはあると思うが、自分が暮らすまちをつくっていく、ということでもあると捉えている。まちがよくなれば、暮らしやすくなる等、自分へのフィードバックもある。2つの側面があると思う。

委員長 表現上、強制的な印象を持たせない方がよいと思う。学んだら教えなければいけない、という印象が感じられないようにした方がよい。

委員 学びが深まるという意味であれば賛同するが、事務局の説明には違和感を覚える。2つの側面があるということも分からなくはないが、「学び送り」を定義しておかないと、基本理念が何か分からなくなってしまう。

委員長 新機軸として「学び送り」という考え方を打ち出したわけだが、それをいかに文章にするのか考えるべきだろう。造語なので緻密に詰めていきたい。

委員 「学び送り」を打ち出すために、学びの目的が「学び送り」だけであるかのようになってしまうかもしれない。学ぶことが好きだから学ぶという人が大多数であろう。それが基本だと思う。ただ、学びをとおしてつながっていききたい人やまちづくりに取り組みたいという人もいると思うので、その支援もあっていいと思う。それぞれ分けて記載した方がよいと思う。

委員 「学び送り」という考え方はよいと思うが、いまの文章は「学んだら送らなければいけない」、と強制されているように感じる。「学び送り合い」という柔らかい表現はよいと思う。造語なので、丁寧に論述した方がよいと思う。

委員 自分はこの理念は非常によいと思っている。先ほど格差について言及する必要があるという意見があったが、それはよいと思う。ただ、武蔵野市の現状を考えると、貧困を取り上げすぎない方がよいとは思っている。

委員 「学び送り」だけが協調されすぎていると思う。生涯学習は「学び送り」だけではないので、そのほかの部分も取り上げた方がよいと思う。

委員 自分は大人にラーニングパートナーをつくって、学んだことを伝えることの有効性を研究してきた。研究の中で気づいたことは、教育を通じて人と人がつながっていくことは大事なのだが、教育という文脈においては学んだ個人が学びを深めることが第一なのではないか、ということだ。この計画は教育委員会が所管するものなので、やはり学びを深めること、そのものも取り上げた方がよいと思う。

委員 これまでのやりとりはよく分かる。「学び送り」が強調されすぎているという意見を踏まえると、やはりこの言葉を適切に説明していかななくてはな

らないだろう。「学び送り」が深い学びにつながっていくということを追記するよいと思う。

ところで、主体的に学ぶことと対話的に学びを重ねていくということが2つの学びとして書かれているが、両者の違いや関連性を明確にしたり、どちらを強調したいのかをはっきりさせたりした方がよいと思う。

委員

学ぶ目的を整理する際に、自分の生活の豊かさが重要になると思う。生涯学習スポーツ課が所管する部分に偏りすぎているように感じる。子育てや家事、介護等、生きていく上で必要な知識を得ていくことも大事である。単に豊かさだけではなく、必須な知識を身につけるという視点もあるので、学ぶ主旨というのは少し整理した方がよいと思う。

副委員長

各委員における学びの捉え方にズレがあるように思う。個人が学ぶときのニーズは、個人から湧き上がってくるものではないはずだ。個人が置かれた社会や環境に誘発されるものなのではないか。社会に生きている自分として、社会的に誘発された学びを自分なりに深めると、結果的に社会に対して自分が積極的に働きかけることになり、社会をよりよくしていくことにもなる。

学ぶことは自分を深めていくことだが、社会に対しても自分が何らかのかたちで位置づけを持つのであれば、社会もよくなる。それは社会の中に置かれた自分が、社会的な背景から求められ、学びたくなるからである。そのようなことを平易な言葉で追記できるとよい。

今後社会が変わっていくということは、求められる学びも変わっていくということである。人生100年時代を生き抜こうとすれば、そのために必要な力はまだ誰も分からないので、そもそもの学び続ける力をつけておかないといけないということになる。それが個人で行われるかぎりではなく、今回の計画では、お互いに学び送り合う関係をつくることで、お互いの学びを鼓舞するようになるようなまちなり方を考えようとしているのだと理解している。行政がどこまでやるかというのは問われるが、基本理念では、こういうようなまちなりをイメージしているということを提示できるとよいと思う。具体的な施策は第4章で書かれればよいと思っている。

委員長

「ライフスタイル・ライフステージがますます多様化していく」という文章があるが、ライフスタイルとライフステージは区別した方がよい。「人々のライフスタイルの多様化」。「ライフステージ」は多様化、という表現でよいのか確認した方がよいと思う。細かいところで気になる点はあるが、次回も引き続き議論することとして、基本方針1に移りたい。

#### 基本方針1 施策1-1について

委員

1-1のタイトルが気になる。タイトルでは様々なテーマと言っておきな

がら、施策ではテーマが絞られているように感じる。カルチャースクールや大学でも生涯学習講座は行われている中で、行政が限りなく市民ニーズに応えていこうとするのか。特色の「A 市民の学びの意欲が高いこと」には「自発的な学習機会を創出していく必要がある」と書かれている。にもかかわらず、どんなニーズに応えて機会をつくっていくということは齟齬があるように感じる。

委員 基本理念では「実社会での課題解決のための能力が求められている」等と書かれているが、これからの変化の中を市民が生き抜くための学びとなるテーマを考えた方がよいように思う。

委員 いろんなことをやっけていこうという趣旨だと思うのだが、行政としてやり切れるのかが気になる。メニューを増やすよりも、自発的な学びを促していくことに注力した方がよいのではないか。また、行政の生涯学習の講座は、初歩的な内容になりがちだと感じる。しかし、リカレント教育のようなレベルの高い内容が求められてもいると思う。メニューを増やすよりも、資格取得につながるように、レベルの幅を広げていくようなことも考えていけるといいのではないか。

委員長 社会の変化の中を生き抜かなければいけないというが、時代の流れに乗れなくてもよい、という価値観の人もいると思う。そのような人を認めるような表現が盛り込めるとよいと思う。

副委員長 生き抜きたくない人に対してどのようにアプローチしようというのか。  
委員 生き抜くということを目指して学ぶということと、そうではない目標の学びがあってもよいのではないか。自分の人生を豊かにするということが目的とする学びは、生き抜くこととは関係がないと思う。

ここで書いているのは変化が前提となっていて、それについていくための学びが重視されすぎていると感じる。そうではない学びを、まず取り上げるべきなのではないか。

副委員長 生き抜く、というイメージが異なっていると思う。競争に勝つということではないと思う。学びを深めることも生きることであり、幸福を追求することも生きることである。その点について共通認識を持たないといけないと思う。

委員長 事務局としてはどのように考えているのか。

事務局 「生き抜く」という言葉は国の政策でも、よく用いられるようになっていて、特別な言葉を使っているわけではない。また、競争を勝ち抜く、という意味合いも持たせていない。個人が主体的に、豊かに生涯を通じて生きていく、というくらいの意味である。

委員長 そのような意味が伝わるように書く必要があると思う。

ところで「学びをえらぶ・はじめる」と「・」で言葉を接続していることが気になる。「・」はひとつの言葉として接続するものであるが、「えらぶ」

と「はじめる」は同じ事柄なのか。

副委員長  
事務局

「えらぶ」と「はじめる」は並列すべき言葉なのか。  
いまの意見を聞いていると、「えらぶ・はじめる」という一体的な言葉として用いてもよいのではないかと思った。並列するべきか、一体的な言葉にするのかという点も議論いただきたい。

委員

生涯学習のスタートになる部分だと思う。生涯学習を始める際には、すでにある講座等を選ぶことしかできない。独自に学ぶことはあり得ると思うが、それは生涯学習計画の枠組みの外ではない。そう考えた上での「えらぶ・はじめる」とつなげたのだと理解している。

事務局

選ぶことで始めるということもあるが、きっかけづくり、学ぶ障壁を取り除くことで始めるということもあるので、選ぶ以外に始める、というのも含めたいという思いがあり、こういう言葉になった。

委員

学びたくない人がいるのではないか、という提起にもどりたい。「世界に変えられてしまわないために」という言葉がある。環境の変化に追いついていくために何か学ばないといけないから学ぶことで、人間がどんどん変わっていく。そうならないようにするためには、世界を変えるためではなくて、世界によって自分を変えられないようにしなければならない。そのためには、自分にはこういう風に見える世界を見えていることを主張するような場所が必要なのではないか。自分はこれを学んだという1つの視点だけではなく、考えを交換するような場所をつくるということも必要なのではないか。

副委員長

行政の施策として計画を策定する上で、どこまで保証するのか。アンケート調査によると、自主的に学ぶ意欲のある人がほとんどなので、行政が何らかの支援を行わなくても学ぶということは期待できる。それを踏まえると、市民から要求があれば機会を提供するという市民提案型の姿勢でもいいのかもしれない。アメリカではそのようなスタイルで生涯学習が行われている。自分たちが必要とするものを市民が要求し、それを行政が応えるというスタンスである。日本は逆で、お膳立てすることが多い。市民から要求があったときに機会を提供した方がよいのか、それとも先回りして機会をつくっておくべきなのか。前者の場合、行政が何もしなければ学ぶこともないのだが、それでよいのか。啓発される対象として市民を捉えるという考え方もあるが、行政のかかわり方について検討しておいた方がよいと思う。

委員長

武蔵野市では社会教育の助成金の申請が非常に多い。自分から学びたいと思い、行政に求めてくる人が多いということだろう。それに対して、市がどう答えていくかだと思う。ますます、どんどん自分でやりたいというのが出てくるような、施策を進める必要がある。

副委員長

その上で、行政が啓発するべきかどうかということが気になっている。た

たとえば医療分野で言うと、従来のいわゆる外因性のシングルファクターではなく、生活習慣病のように医療で治すことができない死因が増えてきている。医者に依存するのではなく、自己管理をしなければならず、自立が求められていると言える。これまでは行政サービスの消費者であればよかったのだが、自立して行動しなければいけなくなっているが、だからこそ啓発が必要なのではないかと思う。個人の問題であり、要求されるのを待つということではよいのか。社会が変化していく中での対応を考える必要があると思う。

委員 啓発ではなく、研究が必要だと思う。いろんな人が集まって研究するような場所を提供すれば、そこで流れを決めることができる。機会を提供するだけでは視点は1つになってしまうので、その機会に乗れない人も出てくる。たとえば学習障害の子どもにどのように教えればよいのかが分からないときに、一緒に方法を検討できる人たちを集めることはできる。そういう場を設け、流れをつくっていくことが必要なのだと思う。

委員 3つの段階があると理解した。アメリカのやり方は、行政は関与せず、市民が何をやりたいかを決め、市民から要求があれば行政はそれに応えるというものだ。もうひとつは、行政が学ぶ機会を提供するものの、市民が任意で選ぶというものだ。最後の段階は、これを学びなさいと促すものだ。その最後の段階を行政が行うというのは、かなり制限的でないといけなのではないか。むしろそれは生涯教学習の中で考えるべきものではないのではないか。生涯学習というのは最初の2つの段階だけだと思う。

#### 基本方針1 施策1-2・1-3について

委員長 主な施策に「ラーニング・フォー・オール」と書かれているが、本文中の「学習機会を全ての人々に」に換えてはどうか。

事務局 キャッチーなタイトルにしたかったというところがある。

委員 行政の範囲について考えるべきだと思う。手を差し伸べることは大切だと思うが、行政にそれほどの余力があるのか。線を引くべきところもあるのではないか。

委員長 行政としてはやろうとする意志があるのではないか。

事務局 行政がなぜ生涯学習に取り組むのかということにかかわる。冒頭にも書いたが、個人の豊かさを向上させるためというのが1つの目的である。それとともに、個人と社会を結びつけ、よい社会をつくるということも書いている。その中には、学ぶ機会に恵まれない人に対するケアも含まれる。それこそが行政の役割だと思う。そういうものがなければ、行政が生涯学習を取り扱う意味がなくなってしまうと考えている。

委員 生涯学習は自発的に始まるものであると思う。そこから大きく逸脱するこ

とは抑制的になった方がよいと思う。

委員 自発的になるためには、啓発しなければいけないと思う。自発的になれない人もいるので、行政が気づきを与えることも必要である。上から啓発するというよりも、気づく機会をつくっていくことが大事だと思う。

委員 これから10年間に求められていることは何かを考えるべきである。学び方は学校教育でも言われていることである。学校教育の範疇にないことを生涯学習分野で学ぶことができるということだと思うので、「「学び方」を伝える事業の推進」の文章は再検討してもらいたい。

委員長 施策がかなり多いが、行政としてやり切れるのかが気になる。

委員 施策の方向性1だけで11個の施策が位置づけられている。すべて実行できればよいと思うが、厳しいのではないかと思う。取捨選択するというのも考えた方がよいのではないか。

委員 リカレント教育は重要である。リカレント教育を実施する際には、それを受け取る人のキャリアにかかわることなので、一定のレベルの内容であるべきだと思う。大学や企業と連携してリカレント教育を行うと書かれているが、その内容について言及した方がよい。そして、その内容についてはレベルについて配慮いただきたい。

委員 この計画は重点的な施策を決めることはないのか。

事務局 以前の委員会で重点的な施策を設定するかどうか議論をさせていただいた。そこで意見がなかったのが、重点的な施策を設定していない。

委員 現在の計画では5つの重点施策が設定されている。今回の計画では、新しく打ち出した「学び送り」に関する施策は重点的に取り組むものと位置づけてもよいのではないか。

委員 この計画で印象的なのは、実行すると約束する文体で書かれていることである。このように書いている以上は実行するということなのか。

事務局 中間まとめ（案）の6ページに現在の事業が一覧にしているが、現時点も多く事業を行っている。すでにあるものを位置づけることで十分なのではないかとも思っている。先ほどのリカレント教育は、五大学の中では会計士の資格が取れるわけではないが、司書の資格が取れたり、会計士の資格の勉強のための講座もある。ただ、土曜日は大学がないので、その辺りは行政の力で増やしていけると、より働きながら学べる人が増えると思う。いわゆる連携の意味はその辺りだと思う。

委員 連携についてはおっしゃったとおりだと思う。実効性のある学習機会にしていく必要があると思う。

委員長 終了時間になったので施策2は次回検討することとしたい。次回までの間に中間まとめ（案）をよく読んでおいてもらいたい。

委員 あと1回の会議でつくり上げないといけないのか。

事務局 パブリックコメントの前には、あと1回だが、パブリックコメント後には

3度ほど行う。

委員 本質的な部分と言い回しについては別に取り扱った方がいいのではないか。日本語の言い回しについては、最終的には委員長一任で、それを受けて事務局に修文をお任せするという話になると思うが。

委員 本来であれば今回にとりまとめ、次回は完成版をご覧いただいて、軽微な修正を行うような段取りを予定していた。ただ、次回に話し合うべき内容が多くなっている状況なので、パブリックコメントの時期についても検討したい。当初より長めに設定していたので調整は可能だと思う。

## 2 事務局からの連絡

事務局より、次回策定委員会の日程について説明を行った。